

10周年を迎えるマスターズ甲子園と神戸大学

2013. 9. 30

甲子園の夢を忘れられない元高校球児たちが予選を戦い抜き甲子園で試合する「マスターズ甲子園」が今年10周年を迎え、11月16日、17日に阪神甲子園球場で記念大会が開催されます。神戸大学発達科学部の長ヶ原誠准教授が「スポーツ同窓会を」と企画して2004年に始まったこの催しは、この間に全国で1万8千人が参加する一大イベントに発展しました。大会を支えるのはボランティア。本大会では神戸大学発達科学部の現役学生、OB・OGだけで200人、老若男女合わせて800人が開閉会式の誘導、プラカード持ちからスタンドでの応援、ハックボードの操作などにあたり、熱闘の舞台裏を支えます。神戸大学に、学生たちに、マスターズ甲子園が与えてきたものは何なののでしょうか。高校野球に、そして日本の地域社会にマスターズ甲子園が与えた影響は何でしょうか。

● 発端は「ワールドマスターズゲームズ」だった

長ヶ原准教授がカナダ留学中の1998年、米国・ポートランドで「第3回ワールドマスターズゲームズ」が開かれました。35歳以上の中高年齢者が集まる4年に1回の国際総合競技大会。神奈川県サッカーチームが現地で楽しんで試合しているのを観戦、「スポーツの同窓会があれば、いくつになっても楽しめる」と思いついたのがきっかけになりました。日本で人気があるのは高校野球、そして地元には球児のあこがれ甲子園球場もあります。高校球児OBは全国で200万人ともいわれますが、そのほとんどは甲子園に出場していません。

「全国の高校野球OBやOGが性別、世代を超えて出身校別に同窓会チームを作り、夢舞台甲子園を目指す大会を作れば、野球が生涯スポーツとして盛り上がり、高校野球のバックヤードを広げることにもなる。その事務局を神戸大学で引き受けて大会運営をすれば、院生・学生に組織運営や財政などのスポーツプロモーションを実地に学ばせる機会を提供できる」。そう直感した長ヶ原准教授は発達科学部の教職員、院生、学生に協力を求めると同時に、阪神甲子園球場にも開催を申し込みました。

このときにマスターズ甲子園の4つの基本理念を掲げました。

- ・ 夢への再挑戦による個々人の生きがいと活力ある人生への応援
- ・ 生涯スポーツとしての野球文化の発展とOB／OG野球クラブの活性化
- ・ 地元高校を中心とした同窓会交流と世代間交流の活性化

- ・ 野球ユース世代への野球文化の継承と応援メッセージの発信

● 甲子園球場を確保できた

阪神甲子園球場はプロ野球のシーズンオフになっても少年野球や他の球技大会、イベントなどにひっぱりだこの人気です。特に土曜、日曜ともなれば新規のイベントが参入する余地はほとんどありません。長ヶ原准教授は粘り強く大会の意義を訴え続け、ついに2004年春、甲子園球場が11月28日（日）の一日開催を認めてくれました。

開催まで半年。まずは参加チームをどうするかでした。この時点で元高校球児が試合をする「都道府県大会」を開催していたのは千葉、山口、愛媛、熊本の4県。それぞれにマスターズ大会への「優勝校」参加を呼びかけて快諾を得ました。甲子園球場にベンチに最大何人入れるかを確認したところ、「立つ人も含めて50人までなら可能」との回答。これで1チームを最大50人編成とすることが決まりました。

発達科学部の長ヶ原研究室に大会事務局と主催団体である全国高校野球OBクラブ連合の事務局を設置。甲子園球場での本大会の運営準備に加えて、地方大会の組織作り、大会のPR、ボランティアの確保と教育、寄付金集めやホームページのバナー広告の協賛依頼などに教職員も院生・学生も走り回り、出場校の参加費を含め計2000万円の大会運営費をかき集めました。

一方で大会規定にも心を砕きました。出場選手は高校硬式野球部員、監督、部長、コーチ、マネージャーのOB・OGであることとしました。試合方法も3回までを34歳以下のチームで行い、4回以降を35歳以上のチームで行い、9イニングもしくは1時間半打ち切りとしました。

● 第1回記念大会に全国132校から379人が参加

2004年11月28日。晴天の甲子園球場で「マスターズ甲子園2004・第1回記念大会」が開かれました。千葉、山口、愛媛、熊本の各県での予選大会の選抜・優勝校4チーム、全国から応募して抽選の上で出場した4チームの計8チームがプラカードガールOGの先導で入場行進。合唱団OGが「栄冠は君に輝く」を高らかに歌い上げて出迎え。感激のあまり行進中に泣き出す選手もいました。選抜・優勝校同士の「選抜記念試合」、抽選で出場したチーム同士の「抽選特別試合」では短い時間で試合を終了させるために、攻守交代は全力疾走。「全員出場」が掲げられているため、選手交代もひっきりなしで、甲子園球場専属のウグイス嬢も大忙し。スタンドに陣取った応援団からは大声援が飛びました。高校野球で試合終了後にベンチ裏通路でインタビューを受けるのに習い、試合に出場した選手全員が大学生の取材ボランティアに囲まれて晴れやかに、時には

涙ぐみながらインタビューを受けました。

試合の前後には「甲子園シートノック」や、どちらか一方が高校野球OB・OGの「甲子園キャッチボール」では、かつてのチームメイトや兄弟、親子がペアを組んでキャッチボール。試合を含め全国132校の最高齢75歳から19歳までの計379人が参加しました。

● 名誉会長に星野仙一さん、応援団長に重松清さん、そして映画化

2005年の第2回大会からは闘将と呼ばれた星野仙一・東北楽天ゴールデンイーグルス監督が大会名誉会長に就任、2日間開催に拡大しました。2006年の第3回大会からは直木賞作家の重松清さんが応援団長に就任し、シンガーソングライターの浜田省吾さんからは大会テーマソング「光と影の季節」が提供されました。2012年の第9回大会には全国324校から約1万3千人が参加。甲子園キャッチボールも「球友編」「親子編」「夫婦編」に発展しました。

重松さんは2007年、マスターズ甲子園をルポした「夢・続投！マスターズ甲子園」を出版するとともに、2012年からマスターズ甲子園を舞台にした小説「アゲイン」を「小説すばる」に連載しています。

この間に登録OB校も増え続け2013年の大会では33都府県468校になりました。予選での悩みもありました。本大会は11月ですから、9、10月に地方予選大会を開くことになります。この時期は高校野球の秋季大会の真っ最中。グラウンド確保が難しく、高校のグラウンドを借りて試合するケースもありました。地域社会にも好影響を与えています。この時期に里帰りするOB・OGが増えました。現役チームのコーチを買って出る人もいます。さらにはボールを大量に送りつけてくる人もいます。

大会ボランティアの輪も広がる一方です。毎年、神戸大の現役学生・院生約100人が手伝っていますが、神戸大OB・OGも約100人が応援に駆けつけます。周辺の甲南女子大などに加えて南は鹿屋体育大学から北は北海道教育大学まで全国20大学から学生ボランティアが結集します。舞台裏ではプロも手弁当で応援しています。電通のクリエイティブのプロ、アナウンサーらのノウハウを学生たちが学ぶ場にもなり、実質的に就活支援にもなっているのです。

●エキストラに協力を

マスターズ甲子園を元にした映画が企画され、今年11月12月に撮影。12月21日、22日には甲子園球場にエキストラを集めて撮影の予定です。事務局では3万人を目標にしています。2014年秋に全国でロードショーが行われる予定です。

この映画には今年のマスターズ甲子園での「甲子園キャッチボール」の光景

や、神戸大学発達科学部なども撮影される予定です。制作プロダクションの「ボイス&ハート」から長ヶ原准教授に「12月の甲子園での撮影にはスタンドを3万人規模のエキストラで埋めたいので、神戸大学としても協力してほしい」という要望が寄せられています。